



一人一台端末時代の単元・授業デザインに向けて

益川 弘如氏 (聖心女子大学現代教養学部教育学科教授)

新型コロナウイルスの蔓延は、常に変動し、不確実で、複雑で、曖昧なVUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) の世界だと改めて実感させられる。GIGAスクール構想の前倒しによって、一人一台端末環境の整備も完了する。いかに学校は変わっていくべきか。新学習指導要領の教育目標は、教科書の内容を「知っていること」から学ぶことで課題が解決「できるようになること」への転換、すなわち「新たな知識を生み出す力」の育成である。鍵は、「知ること (答え探し)」と「できること (答えづくり)」を分断的に捉えないことである。

分断的な考えでは、教科書の基礎的内容を「知っていること」が次に繋がると捉え、直接的に教え、その範囲内で個別最適に練習させ、小テストをクリアさせる。その後、多様な文脈とつなげた課題解決や調査活動に取り組みせる協働的な学びを体験させて児童生徒の満足度を上げ、「きっと、できるようになっただろう」とする。

一体的な考えでは、「できるようになる」ためには教科書の内容の深い学び (意味や根拠、他文脈や領域との関連) が大事とし、多様な文脈の課題に対して協働的な学び、対話を通して自分と他者の考えを比較するなどして、「こういうことなんだ」という形で「できるようになる」適用の仕方と共に個別に納得していく活動に取り組みせる。その学びの思考過程を丁寧に見取り次の授業づくりにつなげ、必要と感じた文脈で個別に練習を行う。

中教審の答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、個別最適な学びと協働的な学びは一体的に行うことが大事だとしている。一体的に行う中で、協働的な学びを支援するツールやオンライン学習などを上手く活用していきたい。

教科等研究グループ各部会からの報告

国語部会

主体的・対話的で深い学びを、
児童生徒が実現できる授業づくり
～国語科におけるICTを活用した授業づくり～

■研究内容

【指導案を持ち寄り、指導法の共有や協議】
・学校での新しい生活様式に適した主体的・対話的な国語の授業にするためのICTの活用について

■研究成果

- ・学年や「話す・聞く、読み、書き、書写」の分野を検討してICTを使用することで、児童が主体的に学べる授業作りができ、児童の学習意欲の向上につながった。
- ・文章を書くことに苦手意識のある児童に対して、ICTを活用することで効果的な支援につながり、児童が主体的に活動するきっかけとなった。
- ・ICTの活用に慣れていないことで取り組み状況に個人差が出た。様々な教科で積極的に使い、慣れる必要がある。



社会部会

問いをもち、考えが深まる
普段の授業づくり

■研究内容

- ・学習問題につながる問いの導き出し方
- ・「まとめ」での整理・思考ツールの活用方法
- ・調べる方法・バリエーションについて

■研究成果

- ・問いを導き出す際の言葉がけ「何が分かる？」
「ということは、どんなことが言える？」
- ・教材をどう見るか。何を資料とするか。
- ・資料の提示方法で思考が変わる。
- ・振り返りをすることで学びが深化する。
- ・学びを広げる問い、導く問い、狭める問い。

